

# たまのよこやま

● 遺跡たより 71

● 遺跡たより 72

● くろがね物語

● 特別展開催のお知らせ



## 〈中高瀬遺跡〉

本遺跡は、多摩川支流の平井(ひらい)川左岸の段丘上に位置します。都道あきる野羽村線の新設に伴い、昨年度より調査を進めてきました。

中高瀬遺跡は、あきる野市草花生まれの故塩野半十郎氏が世に送り出した遺跡で、縄文時代後・晩期の遺跡として知られています。

平成16年度の調査は縄文時代後期の敷石住居跡2棟(写真1)や土坑、後期～晩期の遺物、古墳時代後期の石室、近世の土坑などを検出しました。平成17年度の調査では、より平井川から離れた地点を調査しました。16年度と同一の段丘面のH区で、敷石住居跡1棟、配石5基以上、埋設土器、剥片のつまった小土坑、縄文時代後期の川の跡3条、奈良時代の住居跡1棟、平安時代の焼土跡、近世の土坑や井戸、一段高い段丘上のI区で、縄文時代の敷石住居1棟、集石1基、土坑3基、奈良時代の竪穴住居跡2棟が発見されています。

縄文時代の川(幅約10m、深さ約1.5m)の中から横たわった状態で出土した石棒(写真2)は、長さ77cm、直径12cm、重さ31kgと大きなものです。川の中から石棒が出土する例は少なく貴重な資料となりました。何に使ったのが興味があるところです。同じ川の中から土偶も出ています。石棒が川の底から出ているのに対し、20点ほど出土した土偶は、埋まりかけた川の縁から他の土器や石器とともに多量にまとまって出土していることが特徴です。完全な形のものはありませんが、顔や妊娠を表現したような土偶が目立ちます。顔の特徴はシンプルな穴で表現された目や口に鼻は小さく盛り上げて、鼻の穴の表現もあります(写真3)。また足の破片の大きさから大型のものと小型のもの両者がありそうです。遺物の水洗いが進めば土偶の数も増えそうです。

原稿執筆中にミニ石棒(写真4)が別の川跡から出土しました。長さ4.8cm、重さ3.8gで、表面には赤色顔料が付着しています。

奈良時代の竪穴住居跡は、1棟はやや大型で柱穴が掘り込まれ、もう2棟は小型で柱穴のないものでした。住居内からは土師器・須恵器・鉄製品などが出土しています。

調査が終了次第整理作業となりますが、遺物量は当初予定の3倍以上となりました。

(及川良彦 主任調査研究員)

所在地：あきる野市草花字高瀬  
調査期間：2004年11月～2005年10月  
調査面積：約5,000㎡



1 敷石住居跡



2 縄文時代の川から出土の石棒



3 土偶集合写真



4 ミニ石棒



## 〈多摩ニュータウンNo436遺跡〉

所在地：八王子市堀之内六号  
 調査期間：2005年7月～10月  
 調査面積：2,100㎡

本遺跡は、過去に3度の発掘調査が行われ、3,900㎡ほどが未調査で残っていましたが、今回は、都市再生機構による公園、宅地の造成・整備に関連して調査を実施しました。過去の調査結果からは、平安時代の小規模集落が数時期にわたりこの地域を利用してきたことが明らかにされています。

発掘調査は7月中旬に着手し、現在も調査中ですが、平安時代に帰属すると考えられる住居跡を12～14軒確認中です。住居跡軒数については、隣接または同位置に2～3軒が重複して構築されている住居があることなどから、現在最終的な検討を加えているところです。右に重複する住居の写真1を掲載しました。9号住居と13号住居です。手前が9号、電柱とそのアンカーの間に竈かまどが残っているのが13号です。13号は耕作によりそのほとんどが消滅し、竈と壁の一部がかろうじて残されている状況です。

10号住居跡とした平安時代の住居跡は、谷中で確認をしました(写真2)。後世のかく乱により、50%ほどが失われていましたが、残存部を調査する過程で、大変興味深い事実が判明しました。当初は竈、床に動植物のかく乱が入り込んでいると考えていましたが、調査をする中でこのかく乱が谷を流下する水流であることが判明しました。

この流水は竈と壁の狭間から浸水し、床と壁を押し流して住居の一部を破壊していたのです。右写真の破線で囲んだ所が流路となっていました。

しかし、この流路が形成された時期が、住居で生活していた時点なのか、住居が廃棄された後なのかは今後の検討課題です。

この他の時期の遺構は、近年の耕作や畜産に伴う土坑以外は、検出されていません。遺物は、縄文時代の土器、石器、江戸時代の陶磁器が数点出土しています。(小林 博範 調査研究員)



1 9・13号住居跡



2 10号住居内流路跡



3 6号住居跡



## くろがね物語 - 五 -

### 古代の工具 <下>

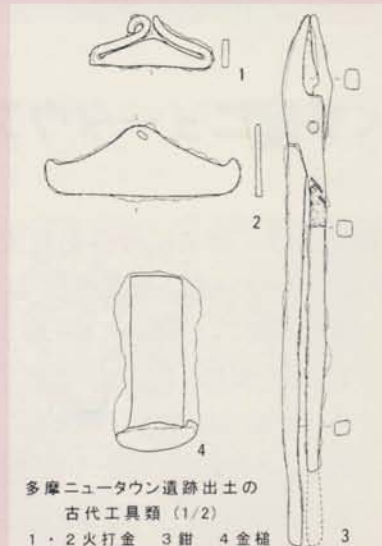
今回は、火にまつわる作業に用いる工具についてみていきます。

まず、火をおこす鉄の道具として火打金（燧）<sup>ひうちがね</sup>があります。多くは両角が丸い山形を呈し、本体上部に紐などを通す穴があげられています。これは発火性がある石を叩いて火花を発生させるもので、まさに生活必需品といえます。

また、鉄（鋼）<sup>はがね</sup>を加工して鉄器を作る鍛冶作業の道具として、鉗<sup>かじ</sup>があります。この道具は現代のペンチやハサミのような形を示し、熱した鉄を挟んで固定し金鋸<sup>かなづち</sup>できたえるためのものです。右の鉗は奈良時代の竪穴建物跡から出土したものです。先端を加工した二本の鉄棒を鉗で固定してつくられています。当時の鍛冶作業は中世の絵巻物などに描かれていて、二人の職人<sup>かんどこ</sup>が金床に据えた鋼に“あいつちを打って”鉄器をつくる様子<sup>ほど</sup>がうかがえます。その脇には、鉄を加熱するための火床があり、木炭や木製フイゴが設置されています。

多摩丘陵の遺跡でも、竪穴建物跡から炉やフイゴの羽口、鉄滓（鉄の不純物）、砥石などがしばしば検出されることから、このような鍛冶作業が村々で行われていたことを物語っています。

（松崎元樹 主任調査研究員）



多摩ニュータウン遺跡出土の  
古代工具類 (1/2)  
1・2 火打金 3 鉗 4 金鋸



鍛冶作業の様子（『職人尽画帖』より）

## 特別展開催のお知らせ

多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査事業は、昭和40年に「多摩ニュータウン遺跡調査会」が発足してから40年が経過した今年度、最後の調査報告書の刊行をもって、事業が終了する運びとなりました。遺跡の調査を締めくくるにあたり、総括の企画展示と講演会を、パルテノン多摩（多摩市）を会場として開催いたします。詳細については改めてご案内致しますので、ご期待下さい。

展 示：「多摩ニュータウン遺跡発掘40年展

多摩新街事始～964遺跡に探る丘陵の恵み～」

— 2006年2月18日（土）から3月19日（日）まで —

講演会：第1回 縄文時代をテーマにした講演（題未定） 2月26日（日）

第2回 古代の生産をテーマにした講演（題未定） 3月4日（土）

### 表紙解説

#### 日野市神明上遺跡 / 横穴墓の調査風景

現在調査中の神明上遺跡では、国道20号バイパスの改修工事に伴う発掘調査によって、古墳時代後期（7世紀頃）の横穴墓（よこあなぼ）が数多く発見されてきました。表紙の写真は、石でふさがれた墓の入口部を調査している様子です。今後の調査によって横穴墓内の様子も次第に明らかにされてくることとされます。詳細は次号の本紙に掲載予定です。



発行 平成17年11月11日 (財)東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター  
〒206-0033 多摩市落合一丁目14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。